

## 19 世紀フランスにおける「文学的なもの」と社会

——ポール・ベニシュ『作家の聖別』『預言者の時代』翻訳出版を機に

司会：片岡大右（東京大学研究員）

報告者：古城毅（立正大学非常勤講師）

世話人・討論者：三宅芳夫（千葉大学准教授）

ポール・ベニシュ（1908～2001）のロマン主義論四部作（1973～1992）は、たんに今日の近代フランス文学史の基本的なパースペクティヴを規定し続けているのみならず、狭く文学をめぐる議論を超えて、近代社会における精神的諸価値のありかを問う文脈では、社会・政治思想史においても頻繁に参照される著作として知られている。すでに古典としての地位を得ているこの連作の翻訳プロジェクトの第一弾として、間もなく第一作『作家の聖別』が刊行されることになっており、やがて第二作の『預言者の時代』が続く見込みである。本セッションは、ベニシュの 19 世紀思想史の紹介を契機としつつも、より広く、非宗教的な精神的権力の形成と、そのプロセスにおける「文学的なもの」の身分規定の変容を、一般的に議論すべく企画された。

セッションにおいては、まずは監訳者の片岡がベニシュの生涯と仕事に関する全般的なプレゼンテーションを行った。アルジェリアのユダヤ人一族というその出自。パリの高等師範学校に学びリセの教員となる傍ら、政治的かつ文学的・芸術的前衛に属してトロツキスト組織で活動したこと（既存の制度的宗教が力を失った近代社会における精神的・霊的なものの在り処を問い、キリスト教の聖職者に代わる新たな聖務の担い手を論じるベニシュ後年のロマン主義研究は、この頃周囲で——娘の命名をシルヴィア・バタイユへのオマージュとして行ったことが、当時の人間関係をよく表している——盛んに論じられていた、聖なるものの探求のテーマを彼なりのやり方で引き継いだものという）。ヴィシー政権によるアルジェリア出身ユダヤ人の市民権剥奪に伴うアルゼンチン亡命と帰国後の不遇。「ソルボンヌの視野狭窄の受益者」となるべく名乗りを上げたハーヴァード大学の招聘を受け、講義義務は一セメスターのみ、学内行政は一切免除という恵まれたポストを得た 50 代以降の充実した研究生活。こうした伝記的事実の素描の後、彼の方法論的問題の要点と一連のロマン主義

研究——四部作への一種の補遺としての重要なマラルメ論を含めた——の持つ現代的な意義が強調され、それが「近代文学史のトクヴィルの総合」とでもいふべき近年の動向を準備したものであることが示された。

次に共訳者のひとりであり、バンジャマン・コンスタンを専門とする古城が報告を行った（以下の要旨は古城執筆）。

古城の報告は、19世紀前半の代表的な自由主義者コンスタンが、ベニシューの著作においてどのように解釈されているかを検討するものであった。ベニシューによれば、19世紀の自由主義は、個人の自由の尊重と、社会統合のためのドグマの必要という近代の本質的緊張を体現する、その意味で当時の最重要の思想潮流であり、コンスタンはこれを体現する人物である。したがって、ベニシューのコンスタン解釈を検討することを通じて、ベニシューの壮大な19世紀文学・思想史研究の特徴がよりよく理解されるのではないかと考えられた。

ところが、コンスタンの実際のプロフィールを確認してみると、ベニシューが定義する自由主義者のそれと必ずしも重ならない。すなわち、ベニシューは自由主義を、世代的にはナポレオン帝政期以降に成人した集団の思想、社会階層的には民衆の政治参加を警戒するブルジョアジーの思想と定義するが、コンスタンはフランス革命期から活躍しており、政治的には民衆寄りであった。自由主義者の典型とされるコンスタンが自由主義の定義からはみ出てしまう。このことは、何を意味するのか。

古城によれば、それは、彼の思想史の手法の一般的な問題を示唆する。第一に、（博覧強記にも拘わらず）先行研究が十分に咀嚼されていないという問題である。実際、ベニシューが主要なコンスタン論を執筆した1970年代には、Pierre Deguise や Patrice Thompson によってコンスタンの主著『宗教論』の草稿研究が進展し、コンスタンが、ネッケルやドクトリネールのみならず、スタール夫人とすら大きく異なる立場をとっていたことが明らかになっていたにもかかわらず、ベニシューは彼らをみな自由主義者として一括してしまっている。第二の問題点は、思想家の思想変化が十分に把握されていないことである。すなわち、ベニシューはコンスタンがフランス革命期には共和派・反キリスト教的な立場を採っていたことを認めつつも、その彼がなぜ晩年に『宗教論』を書き、宗教感情を擁護するようになったのかを説明せずにクザンらと一括してしまう。

その結果、コンスタンが、革命期に共和派として活躍したのち、ナポレオン政権下で共和派のエリート主義・独断性を反省した点、それゆえ『宗教論』では、真偽の区別に基づく上からの支配を批判し、宗教感情の擁護を通じて個々人の主観を尊重するようなデモクラシーを実現しようとした点が捉えられていない。第三の問題点は、知識人権力の確立という点に絞った叙述であるがゆえに、各思想家の具体的な社会構想が十分に検討されていないことである。実際、コンスタンをドクトリネールらと一括する際、ベニシューはコンスタンの政治・社会論がドクトリネールのそれと大きく異なる点を指摘しない。以上の問題点が示唆するのは、一つのテーマに関する思想諸潮流の対抗図式を描き、その中に多数の思想家を配置していくというベニシューの手法では、思想家たちの多様で揺れ動く声を、政治・社会を巡る複雑な問題連関を背景において、ポリフォニックに響かせることは難しいのではないかということである。

しかしながら、古城は、ベニシューの研究が、そのスケール（哲学・文学・政治学・宗教学にまたがる）、および学識（同時代の新聞・雑誌記事まで含めた大量の資料に基づく）において未だ類例のない古典であることも強調する。そして、近年の自由主義研究が「政治」思想研究の名の下に検討対象・参照文献を根拠なく絞りがちであることに鑑みれば、今後の課題は、ベニシューの試みの包括性を継承しながら、その問題点を克服するための方策を考えていくことであろうと指摘する。それは具体的には、各思想家に関する高水準のモノグラフィー群を連結し、多様な視点が交錯するような思想史の実現を目指すことであり、更に具体的に言えば、そのような叙述を可能にするような、研究者間の新たな協力体制の在り方を模索していくことであるとされる。

最後に、ベニシューのいわばライヴァルであり、今日なお再読されるべき一連の文学論を残したサルトルを専門とする三宅が、翻訳チーム外部からの参加者として報告を行った。その要旨は以下の通り（三宅執筆による）――

三宅の報告の第一の論点は、専門とするサルトルとベニシューの比較の問題であった。まずサルトルについては、現在、アカデミズムにおけるフランス文学研究や社会思想史研究においては、特に真面目な「研究」的位置づけがあるようには思われず、あえて言えば怠惰な「偏見」に基づいた「イメージ」が偏在しているだけであるといった方が事情に則していよう。が、一応その「イメージ」に依拠するならば、まずはベニシューとは対極的な存在として配置され

ることになるだろう。

ただ、今回訳稿を通読しての第一印象は、むしろ両者はかなりの程度19世紀における「文学」と「社会」についてのパースペクティヴを共有している、ということであった。無論、サルトルの19世紀「文学」についての具体的かつ詳細な分析はマラルメ、そしてフローベールについてのものであるので、19世紀前半に焦点をあてた今回のベニシュの仕事とは直接の分析対象となる時期は異なる。とは言え、「1848年」以降、つまり「ポスト二月革命」期における「文学」と「反文学」の成立への系譜学的問いと連関して浮かび上がるサルトルの「長期」のパースペクティヴとベニシュのそれとの間には不思議な程通底する面が多い。このことは、ベニシュのインタビューでのマラルメへ言及している箇所でも強く確認される。

また、「サルトル以降」として自己規定する、「社会」・「政治」・「歴史」的文脈から「文学テキスト」を切り離して扱う「文化記号論」的アプローチからの「遠さ」という点でもベニシュのサルトルとの「親和性」は強く感じられる。

報告の第二の論点は「ロマン主義」の構成要素としての「メガロマニー」に注目した場合、フランス革命とナポレオン、とりわけ「神話」としての「ナポレオン」との関係は今後の研究において避けて通れないものではないか、というものであった。その場合、とりわけヴィクトル・ユーゴーの位置づけ直しは不可欠な作業になるだろう。

以上の報告を踏まえ、パネリスト間の議論とフロア（参加者は十数名）との質疑応答が続いた。主立ったやり取りを以下に紹介する（古城執筆による）。まず、三宅から古城報告に対して、ベニシュの手法は、フランスにおける知識人の影響力の大きさを自明の前提としたものであり、20世紀のフランス社会の思想状況の中で、サルトルやレイモン・アロンらとの比較も踏まえた上で、理解されるべきであるとの指摘がなされた。他方、フロアからは、古城の解釈——コンスタンの自由主義はデモクラシーに向かっており、彼の『宗教論』にはそのことが表明されている——に対して、古城のいうデモクラシーとは具体的にいかなるものを指すのか、そもそも『宗教論』はコンスタン思想において果たしてそれほど重要なものなのか、といった質問が出された。いずれにせよ、ベニシュの遺した19世紀思想史研究群が、内容的にも研究手法においても、依然として古典であるという点で討議参加者たちの意見は一致したように思わ

れる。

(以上、特に断りのない部分は片岡執筆)